

「感動詞」の定義の変遷について

石川 創*

A Historical Study on the Definition of “Interjection” in Japanese Linguistics

So ISHIKAWA*

【キーワード】 日本語史, 国文法, 感動詞, 感歎詞, 感嘆詞

1. はじめに

現代の日本語学において、感動詞の意味・機能の研究は多様な観点から行われているが、感動詞そのものの定義について議論されることは少ない。研究者が断りをいれずに「感動詞」という術語を用いるとき、それは次の二点を前提とした品詞のことを指している。

- ア. 自立語であり活用がなく、文中の他の成分から独立している（＝独立語である）。
- イ. 感動の表出、呼びかけ、応答などに用いられる。

例えば『日本語学研究事典』（2007年）の「感動詞」の項（小林賢次執筆）¹では、感動詞の意味・用法を「①話し手の感動・詠嘆・疑問などの感情を表出するもの（ああ・あれ・えっ・おお・おや・ふん・なんと・まあ・ようし）。②呼びかけ（おい・こら・ちょっと・もしもし・よう・やい）。③応答（はい・うん・いいえ・いや・ええ）」と分類している。

ア・イの二点は、『国語学辞典』（1955年）の「感動詞」の項（金田一春彦執筆）²においてすでに言及されており、「他の語とは多かれ少なかれ独立に文を構成するのをたてまえとし、単語のうちで、表情音に近く、ただ音韻構造など

の点で一般の単語と同類に収められる。国語では自立語の一。」、また、「普通、感動詞と呼ばれるものは、二種に分かれる。(1)『ああ（困った）・おや（たいへんだ）・おっと（危い）』のような、感情の表出をするもの。典型的な感動詞である。(2) 応問に用いられるもので、その中に、『おい（君）・もし（おかみさんえ）』のような呼びかけに用いるものと、『はい（ここです）・いや（ちがう）』のように、答に用いるものがある。」と解説されている。

なお、「呼びかけ」や「応答」の機能を持つ語が「応答詞」と呼ばれることもあるが、これは感動詞から独立した品詞ではなく、感動詞の下位類とされることが一般的である。

いずれにせよ、「感動詞」という品詞が上記ア・イの二点を前提とした品詞であるということは、1950年代にはすでに一般的な認識となっており、現在に至っていることが分かる。

しかし感動詞は、はじめから「感動詞」という術語であったわけではなく、またア・イの二点を前提とした品詞であったわけでもない。「感動詞」の術語は、大槻文彦「語法指南」（『言海』所収、1889年）に端を発するが、鈴木一彦³をはじめとする先行研究が指摘している通り、同

*人文学部 日本文化学科

書においてはいわゆる「副助詞」や「終助詞」の類をも「感動詞」の中に入れている。後にも述べるが、近代においては助詞を感動詞の一類とする文献も多く見られた。

それでは感動詞は、いつのころから「感動詞」と呼ばれることが一般的となり⁴、また現行の定義となっていたのであろうか。

本稿では近代の文典の記述を観察し、「感動詞」の成立の過程を明らかにしたい。

2. 先行研究と本稿の立場

感動詞の研究史に関して、鈴木一彦は感動詞の品詞論上の位置づけと感動詞に含まれる語彙について論じるために、近世から現代にかけての文法論を顧みており⁵、松岡洸司も中世末から現代にかけての文法論における感動詞に関する記述を整理している⁶。

代表的な感動詞の研究は、これらの文献の中で触れられているが、本稿で扱うのは、「一般的」な感動詞の認識・定義の問題である。山口堯二は、「いわゆる感動詞（中略）として捉えるべき語の範囲は、山田孝雄氏などによる批判によって、次第に今日の通説的な範囲に定着してきたらしい⁷」と指摘するが、次節以降の調査によって、その「通説的な範囲」への「定着」の過程をたどってゆきたい。

3. 近代の文法書等における「感動詞」の範囲

3.1 調査項目・調査資料について

本節では、近代の文典における感動詞に関する記述を観察する。具体的には、各文典について、次の4点を調査する。

- ウ. 感動詞に相当する品詞にどのような術語をあてているか。
- エ. 助詞を感動詞の一類としているか。
- オ. 「呼びかけ」を感動詞の機能として認めているか。

カ. 「応答」を感動詞の機能として認めているか。

これらの項目を調査することにより、「感動詞」という術語が定着し、また感動詞が「独立語」となり、さらに「感動の表出」だけでなく、「呼びかけ」や「応答」の機能を有することとなる過程が明らかにできるはずである。

本稿で調査した資料は、明治期から戦前までの昭和期における文法書や国語教科書・指導書などである。明治期124文献、大正期36文献、昭和期37文献の計197文献を調査した。特に明治期の文献を選出するにあたっては、井島正博の論考⁸の調査に用いられている文典資料を参考にした。

3.2 明治期における「感動詞」について

本項より、明治期（本項、表1）、大正期（3.3、表2）、昭和期（3.4、表3）に分けて、調査の結果を整理する。

表1～3に関する注意事項を、以下に示す。

キ. 表1～3に掲げた全197文献は、すべて国立国会図書館所蔵の資料を確認したものである。本稿では紙面の都合上、各文献の出版者については記載しなかった。

ク. 「術語」の列について、文献によっては「感動詞（感歎詞ともいう）」のように、複数の術語が掲げられていることもあるが、その場合には筆頭の語を記した。

ケ. 「助詞」の列について、「○」の印は「かな、よ、や」等の助詞を感動詞の語例として挙げているものであり、「△」の印は「悲しきかな」のような助詞を含む句全体を感動詞の例としているようなものである。

コ. 「呼掛」の列について、「○」の印は、感動詞の機能として「呼びかけ（応呼、招呼、誘起、……）」に用いるという解説がなされているものであり、「△」の印は、そう

した解説はないが、感動詞の語例として「やよ、もし、いざ、さあ」等の語が挙げられているものである。

サ. 「応答」の列について、「○」の印は、感動詞の機能として「応答（応唯、呼応、……）」に用いるという解説がなされている

るものであり、「△」の印は、そうした解説はないが、感動詞の語例として、「はい、うべ、いや、いな」等の語が挙げられているものである。

上記の点を踏まえ、本項では明治期の文典の調査結果を示す。結果は表1の通りである。

(表1) 感動詞の定義に関する対照表・その1——明治期

	著者・編者および書名	発行年月	術語	助詞	呼掛	応答	備考
(1)	古川正雄『絵入智慧の環 初編下 詞の巻』	1870.9	なげきことば		△		
(2)	田中義廉『小学日本文典 卷之三』	1875.11	感詞	○			
(3)	中根淑『日本文典 下巻』	1876.3	感歎詞	△	○	○	
(4)	藤田維正・高橋富兄『日本文法問答』	1877.1	感詞	△			
(5)	安田敬斎『日本小学文典 卷上』	1877.1	歎息詞				
(6)	春山弟彦『小学科用日本文典 卷二上・下』	1877.2	感詞	○	○	○	
(7)	物集高見『初学日本文典 卷之下』	1878.7	嘆辞	○			
(8)	中島操編『小学文法書 中』	1879.1	感詞	△			
(9)	浅井馨『作文用字詳説』	1884.7	感嘆詞				
(10)	里見義『日本文典』	1886.6	感歎辞	○			注 ⁹
(11)	大槻文彦『語法指南』	1889.5	感動詞	○	○		注 ¹⁰
(12)	落合直文・小中村義象『日本文典』	1890.12	歎詞				
(13)	手島春治『日本文法教科書』	1890.12	感歎言	○			
(14)	大和田建樹『和文典 中』	1891.4	感詞	○	○	△	
(15)	高橋清太郎『日本文法伝精神』	1891.4	感歎詞		△		
(16)	高津楯三郎『日本中文典』	1891.6	感動詞	○	△		
(17)	村山自彊編『普通教育国語学文典 前編』	1891.12	感歎詞		○		
(18)	落合直文『日本文典』	1891-92	歎詞	○	△		
(19)	大宮宗司・星野三郎『日本小文典』	1892.1	嘆詞		○	○	
(20)	大久保初雄『中等教育国語文典』	1892.2	感動詞	○	○		
(21)	落合直文・小中村義象『中等教育日本文典』	1890.12	歎詞				
(22)	木村春太郎『日本文典』	1892.11	感嘆詞		△		
(23)	村田鈔三郎『国語文典』	1893.5	歎詞		△		
(24)	落合直文・小中村義象・橋本光秋『普通日本文典』	1893.5	歎詞	○	△		
(25)	秦政治郎『皇国文典』	1893.8	感体言	○	△		
(26)	西田敬止『応用日本文典』	1894.1	感詞		○		

	著者・編者および書名	発行 年月	術語	助詞	呼掛	応答	備考
(27)	大宮宗司『初等教育日本文典』	1894.2	感動詞		△		
(28)	加部巖夫編述『語学教授本 本編』	1894.8	感歎詞	○	○	○	
(29)	田中義之『受験必携日本文典問答』	1894.11	感歎詞	○			
(30)	遠藤國次郎・鈴木重尚『日本文典教科書』	1894.11	(感歎) 助詞	○	○		注 ¹¹
(31)	岡崎遠光『日本小文典』	1895.2	感詞	○	○		
(32)	関根正直『普通国語学』	1895.3	感詞		○		
(33)	遠藤國次郎・平野秀吉・田中勇吉『実用文典』	1895.7	歎詞		△		
(34)	服部元彦編『中等教育日本文法』	1895.8	感動詞		△		
(35)	峰原平一郎『普通文典』	1895.8	感動詞	○			
(36)	新保磐次『中学国文典』	1896.3	感歎詞	○	○		
(37)	大宮兵馬『日本語法』	1896.3	感歎詞		△	○	
(38)	大槻文彦『広日本文典』	1897.1	感動詞	○	○		
(39)	中島幹事『中学日本文典』	1897.2	感動詞	○	○		
(40)	渡邊弘人『新撰国文典』	1897.3	感歎詞	○	△		
(41)	中等学科教授法研究会『中学教程日本文典』	1897.3	嘆詞	○	△		
(42)	鳥山讓『国文の栞』	1897.7	感歎詞	○	△		
(43)	岡直廬『中等教育国文典』	1897.7	感歎詞		△		
(44)	大久保初雄『日本中文典』	1897.7	感動辞	○	○		
(45)	岡倉由三郎『日本文典大綱』	1897.11	感詞				
(46)	大槻文彦『日本文典初歩』	1897.11	感動詞	○	○		
(47)	和田萬吉『新撰国文典』	1897.11	感歎詞	○	△	○	
(48)	塩井正男『中学日本文典』	1897.11	感動詞	○	○	○	
(49)	中島幹事『中学普通文典』	1898.3	感動詞	○	△		
(50)	三土忠造『訂正中等国文典 上巻』	1898.4	感動詞	○			
(51)	白鳥菊治『中等教育新撰日本文典』	1898.4	感動詞	○	△		
(52)	松下大三郎・宮本静『中学教程日本文典』	1898.4	感嘆詞	○	△		
(53)	味岡正義・大田寛『中等教育皇国文典』	1898.7	感歎詞	○	△		
(54)	上谷宏『中等教科新体日本文典』	1898.8	感歎詞		△		
(55)	大林徳太郎・山崎庚午太郎『中学日本文典 中巻』	1899.1	感動詞	○	△		
(56)	高田宇太郎編『中等国文典』	1899.3	感歎詞	○	△		
(57)	佐方鎮子・後閑菊野『女子教科普通文典』	1899.4	感歎詞	○	○		
(58)	大平信直『中等教育国文典』	1899.7	感詞		○	○	
(59)	藤井錢『日本文法筌蹄』	1899.7	感嘆詞		△		注 ¹²
(60)	手島春治『新撰日本文典 上巻』	1899.9	感歎詞	○	○		

	著者・編者および書名	発行 年月	術語	助詞	呼掛	応答	備考
(61)	下田歌子『女子普通文典』	1899.11	感歎詞	○	△		
(62)	鈴木忠孝『新撰日本文典』	1899.12	歎詞		△		
(63)	杉敏介『日本小語典』	1900.1	感歎詞	○	△		
(64)	森下松衛編『中学国文典 巻上』	1900.3	感動詞		○		
(65)	普通教育研究会編『中学教程新撰日本文典』	1900.6	感嘆詞	○	△		
(66)	飯田永夫『日本文典大意』	1900.7	感歎詞	○	△		
(67)	野田五郎助編『新体国文法書』	1900.10	感動詞	○			
(68)	大槻文彦『日本文法教科書 上巻』	1900.11	感動詞	○			
(69)	篠崎純吉編『訂正中等国文典例解』	1900.12	感動詞	○	△		
(70)	松平静, 松下大三郎補『新編日本文典』	1900.12	感動詞	○	△		
(71)	平田盛胤述『国語学日本文典』	1900	感歎詞	○	△		
(72)	帝国通信講習会編『日本文法講義』	1901.1	感動詞	○	○		
(73)	藤井錢『日本文典』	1901.2	感嘆詞		△	○	
(74)	芋川泰次編『日本文法教科書』	1901.8	感動詞	○	○		
(75)	塩井正男『中学国文典』	1901.9	感動詞	○	○		
(76)	高木尚介『中等皇国文典 上巻』	1901.9	感動詞	○			
(77)	鈴木忠孝『日本文典大綱』	1902.2	感歎詞		△		
(78)	新楽金橘『中等教育实用日本文典 上巻』	1902.2	感動詞	○	△		
(79)	大槻文彦『日本文法中教科書』	1902.5	感動詞	○	○		
(80)	日野篤信『摘要日本文典』	1902.7	感動詞		△	○	
(81)	三石賤夫編『日本文典』	1902.9	感動詞	○	△		
(82)	鈴木暢幸編『日本文法』	1902.9	感動詞	○			
(83)	佐々政一『日本文典 巻一』	1902.10	感嘆詞	○	△		
(84)	三石賤夫編『文典の栞』	1902.11	感動詞	○	△		
(85)	吉田弥平・小山左文二・小島政吉『国文典教科書 巻一』	1902.12	感動詞	○	△		
(86)	横地清次郎編『国文法教科書 巻三』	1903.2	感歎詞		△		
(87)	大宮兵馬『中等日本文典』	1903.3	感動詞		○	○	
(88)	永井一孝『国文法要義 第一編』	1903.4	感動詞				
(89)	吉田弥平・小山左文二『新撰国文典』	1903.4	感動詞	○	△		
(90)	上村左川編『新撰和英文典問答』	1903.10	感動詞	○	△		
(91)	教育学術研究会編『師範教科国語典 上巻』	1903.11	感動詞	○	△		
(92)	明治書院編輯部編『女子日本文典 上巻』	1903.10	感動詞		△		
(93)	畠山健『中等日本文典 一の巻』	1904.3	感動詞	○			
(94)	松本亀次郎『言文対照漢訳日本文典』	1904.7	感歎詞	○	△	○	

	著者・編者および書名	発行年月	術語	助詞	呼掛	応答	備考
(95)	蓮沼諄三郎『品詞捷徑』	1904.8	感動詞	○	△		
(96)	芳賀矢一『中等教科明治文典 卷之一』	1904.12	感動詞				
(97)	小山左文二『日本文法の解説及び練習』	1905.1	感動詞	○	△		
(98)	六盟館編輯所編『国文典表解』	1905.1	感動詞	○	○		
(99)	和田萬吉『日本文典講義』	1905.12	感歎詞		○		
(100)	三石賤夫『国文典』	1905.12	感動詞	○	△		
(101)	四宮憲章『国語文法提要』	1906.3	感嘆詞	○	△		
(102)	普通学講習会『表説日本文典』	1906.5	感動詞	○	○		
(103)	門馬常次『文法応用東文漢訳軌範』	1906.7	感歎詞	○	△		
(104)	金澤庄三郎述『日本文法講義』	1905-06?	感動詞	○	△		
(105)	林治一『日本文法講義』	1907.1	感動詞	○	△		
(106)	小野辰太郎『言文一致日本文典表解』	1907.1	感歎詞		△		
(107)	大林徳太郎『受験用復習用日本文典摘要』	1907.4	感動詞				
(108)	森脇俊作『国文法要解』	1907.5	感動詞		△		
(109)	児崎為槌『漢訳高等日本文典課本』	1907.5	感動詞	○	△		
(110)	女子教科研究会編『表説日本文典』	1907.5	感動詞		△		
(111)	佐藤仁之助『受験参考日本文法解義』	1907.9	感歎詞	○	○		
(112)	阪本芳太郎『女子日本文典参考書』	1907.9	感歎詞	○	△		
(113)	松平静『文法及作文』	1908.1	感動詞				
(114)	山田孝雄『日本文法論』	1908.9	感応副詞		○	○	
(115)	三矢重松『高等日本文法』	1908.12	感動詞		△	○	
(116)	本多亀三『普通文口語文漢文法集成』	1910.2	感嘆詞	○	○		
(117)	堀江秀雄『日本文典問答』	1910.6	感歎詞	○			
(118)	中等教科研究会編『中等教科摘要国文典』	1910.7	感動詞	○	○		
(119)	物集高見校閲・林治一著『国文法解義』	1910.8	感動詞		△		
(120)	明治中学会編『言文一致国文法講義』	1911.4	感動詞	○	○		
(121)	神谷保朗『増訂中等教科国文法要綱』	1911.6	感動詞	○			
(122)	教育研究会編『小学校教員検定受験用国文法講義』	1911.9	感動詞		○	△	
(123)	芝野六助・大石市太郎・小野忠治編『語法要覧』	1912.6	感動詞	○	△		
(124)	吉岡郷甫『文語口語対照語法』	1912.7	感歎詞		○	○	

表1をふまえ、明治期の文典における感動詞の定義の特徴を見ていく。

「術語」について、1890年代までは「感詞、歎詞（嘆詞）、感歎詞（感嘆詞）、感動詞」など、

様々に呼称されている。しかし1900年代以降は、ほぼ「感歎詞（感嘆詞）」か「感動詞」のいずれかとなっている。明治期全体を通じては、全124文献中、「感歎詞（感嘆詞）」が39文献（31.5%¹³）、

「感動詞」が57文献(46.0%)である。なお、1890年代の51文献に限定すると、「感歎詞(感嘆詞)」が19文献(37.3%)、「感動詞」が13文献(25.5%)であり、1900年以降の63文献では「感歎詞(感嘆詞)」が18文献(28.6%)、「感動詞」が43文献(68.3%)となる。

(11) の大槻文彦「語法指南」(1889年5月)が著されて以降、「感動詞」の術語が広まるようになり、1890年代までは比較的広く「感歎詞(感嘆詞)」が使われていたものの、しだいに「感動詞」の方が優勢になっていったといえそうである。

なお、本稿では調査対象としなかったが、ビー・エッチ・チャンブレ『日本小文典』(1887年4月)¹⁴では、感動詞に相当する品詞を「間投詞」と呼んでいる。(114)の山田孝雄『日本文法論』(1908年9月)においても、「西洋文典のInterjectionは感動詞と称せらるれど、そは寧、間投詞といふ訳語を妥当とするなり」(p.129)と指摘されているが、本稿の調査のかぎり、「間投詞」が国文典に用いられることはまれであり、一般的には外国語に関わる文典で使用されているようである。

「助詞」の列において、「△」・「○」の印がついたのは、全124文献中82文献(66.1%)、「△」=3文献、「○」=79文献であった。明治期を15年ずつ1868-82年、1883-97年、1898-1912年の3期に分けると、「△」・「○」の印がついたのは、1868-82年が8文献中6文献(75.0%)、1883-97年が40文献中24文献(60.0%)、1898-1912年が76文献中52文献(68.4%)であり、明治期を通じて、助詞を感動詞に含める立場の方が優勢であったことがわかる。

さきにもあげた、(114)の山田孝雄『日本文法論』においては、当時の国語学における感動詞の扱いについて、次のように整理している。

国語学の歴史を按ずるに所謂感動詞といふ名目を設くることは西洋文典の摸倣によりて設けられしを始めとす。かくてこの感動詞の名目中に包入せしむる詞につきては現今の文法家は二派に分れをるもの如し。

甲は あな、あはれ の如く、他の語の上に用ゐらるゝものと、かな、や、な、の如く他の語の下に用ゐらるゝものとを総べて感動詞と称するもの。

乙は あな あはれ の類のみを以て感動詞とし、かな、な、や の類をば助辞(又は弓爾乎波)の類に入れて感動詞とはせざるもの。

(pp.128-129)

研究者により助詞を感動詞に含めるか否かの立場に違いがあったことは、当時から意識されていたようである。

明確に助詞を感動詞から除外する立場の文献として、例えば(58)の大平信直『中等教育国文典』(1899年7月)がある。同書では、「感詞」について、「但し、この語は、弓爾乎波などの如く、他語の下に附属して用ゐらるることなし」(p.102)としている。また、(115)の三矢重松『高等日本文法』(1908年12月)においても、「感動詞」について、「されど感動の意を表せばとて、独立詞ならぬは感動詞にあらず。カナ ヤナ カヤ ヨ ネ ナなどはテニヲハなること早く詞辞分類の処に言へるを忘るべからず。」(p.349)としている。

「呼掛」の列において、「△」・「○」の印がついたのは、全124文献中99文献(79.8%)、「△」=62文献、「○」=37文献)であった。「助詞」の列と同様に、明治期を15年ずつ3期に分けると、「△」・「○」の印がついたのは、1868-82年が8文献中3文献(37.5%)、1883-97年が40文献中32文献(80.0%)、1898-1912年が76文献中

64文献(84.2%)である。明治中期には、感動詞に呼びかけの機能を認める考え方が広まっていたといえるであろう。

「応答」の列において、「△」・「○」の印がついたのは、全124文献中17文献(13.7%、「△」=2文献、「○」=15文献)であった。「助詞」・「呼掛」の列と同様に、明治期を15年ずつ3期に分けると、「△」・「○」の印がついたのは、1868-82年が8文献中2文献(25.0%)、1883-97年が40文献中6文献(15.0%)、1898-1912年が

76文献中9文献(11.8%)である。明治期において、感動詞に応答の機能を認めるのは、まだ一般的な考え方ではなかったといえる。

以上、本項では明治期の文典における感動詞の記述を概観した。

3.3 大正期における「感動詞」について

本項では、大正期の文典の調査結果を示す。結果は表2の通りである。

(表2) 感動詞の定義に関する対照表・その2——大正期

	著者・編者および書名	発行年月	術語	助詞	呼掛	応答	備考
(125)	中等教育学会編『国文』	1912.8	感動詞	○	○		
(126)	高橋竜雄述『日本文典講義』	1913.3	感歎詞	○	○		
(127)	友田宜剛『小学教育に於ける文法と綴方との解決』	1913.10	感動詞		△	△	
(128)	落合直文『普通文典』	1915.7	感歎詞		○		
(129)	鈴木松太郎『日本文法』	1915.12	感動詞	○			
(130)	高橋竜雄『大正文典要義』	1915.12	感動詞		△	△	
(131)	岡田正美編『新編実用日本文典』	1916.1	感動語		△	△	
(132)	日下部重太郎編『日本ローマ字文自在』	1916.7	感動詞		○	○	
(133)	井上宗助・大野佐吉『国定読本文語法と口語法』	1916.9	感動詞	○	△	△	
(134)	野村八良『女子教科新国文法 上巻』	1916.10	感動詞	○	○		
(135)	国語調査委員会編・文部省『口語法』	1916.12	感動詞		○	○	
(136)	山内伊蔵『国語要説』	1917.7	感動詞	○	△		
(137)	大石市太郎編『語法要覧』	1917.10	感動詞	○	△		
(138)	山田孝雄・内海弘藏『中等国文法教科書 上巻』	1917.10	感動詞		△		注 ¹⁵
(139)	保科孝一『大正日本文法 上巻』	1917.10	感動詞	○	○	○	
(140)	吉沢義則『中等日本文法教科書』	1917.11	感動詞		△	△	
(141)	吉岡郷甫『中等国語法』	1918.6	感動詞		△		
(142)	小原要逸編『文法要説』	1918.7	感動詞		△		
(143)	保科孝一編『大正日本文法教授参考書』	1918.7	感動詞		○	○	
(144)	鴻巣盛広『新撰国語法』	1920.8	感動詞		△		
(145)	谷垣勝蔵『日本活語法』	1920.11	感歎詞	○	○	△	
(146)	小林好日『標準語法精説』	1922.10	感動詞	○	○	○	
(147)	開成館編輯所編『現代日本文法教授備考』	1923.1	感動詞		△	△	

	著者・編者および書名	発行年月	術語	助詞	呼掛	応答	備考
(148)	吉沢義則『中等新国文典別記』	1923.6	感動詞				
(149)	村上直治郎編『品詞仮名遣及送仮名法』	1923.6	感動詞	○			
(150)	福永勝盛『新撰国文典』	1923.7	感動詞		△		
(151)	春日政治『新体中等国文法』	1923.11	感動詞				注 ¹⁶
(152)	松下大三郎『標準日本文法』	1924.12	感動詞		△	△	
(153)	三並徒作『新仮名遣と常用漢字の字引』	1925.9	感歎詞	○	△	△	
(154)	荒瀬邦介『問答式学生の国文法』	1925.9	感動詞		△	△	
(155)	石田貞吉『国文法の解義と練習』	1926.1	感動詞		○	○	
(156)	中村好『学習参考受験準備国文法要解』	1926.6	感動詞		△	△	
(157)	吉岡郷甫『文語口語対照語法』	1926.7	感歎詞		○	○	
(158)	綾田方剛『学生参考の国文法』	1926.8	感動詞	○	○	○	
(159)	三浦圭三『総合日本文法講話』	1926.9	感歎詞	○	△	△	
(160)	山下三郎『受験学習国文法要領』	1926.9	感動詞	○	△	△	

表2をふまえ、大正期の文典における感動詞の定義の特徴を見ていく。

「術語」については、全36文献中、29文献(80.6%)が「感動詞」、6文献(16.7%)が「感歎詞」であり、明治期に比べ、「感動詞」が広く用いられるようになっている。「感歎詞(感嘆詞)」は、前項であげた「問投詞」と同様に、国文典よりも、英語をはじめとする外国語に関わる文典に多く見られるようである。

「助詞」の列において、「○」の印がついたのは、全36文献中15文献(41.7%)である(「△」に該当する文献なし)。明治期の66.1%に比べると、その割合は低下している。また大正期になると、助詞を感動詞から除外することを明言する文献が増える。

例えば、(144)の鴻巣盛広『新撰国語法』(1920年8月)では「助詞の中にも感動の意をあらはすもの多きは已に述べたるが如し。然れどもそれ等は文の中途または末尾にありて他語に附属するを職とし、独立せざるを以てこゝには掲げず。感動詞とは文の始めにあり、且独立して意

義あるものをいふと知るべし。」(p.256)とし、(155)の石田貞吉『国文法の解義と練習』(1926年1月)でも、「独立に用ひられる語でなくてはならぬ。『美しきかな』の『かな』の如きは感動を表してゐるけれど他の語と結合してゐるから、感動詞でなく助詞である。」(p.146)と論じ、感動詞は「独立語」であることが強調されている。その他、(130)、(143)、(147)、(148)の各論においても、助詞と感動詞とを区別する旨が述べられている。

(135)の国語調査委員会編・文部省『口語法』(1916年12月)の別冊付録である『口語法別記』(1917年4月)¹⁷は、大槻文彦が担任編纂したものであるが、第1節でも述べたように、大槻は(11)「語法指南」(1889年5月)において、副助詞や終助詞の類を感動詞に含めており、その後の(38)、(46)、(79)等においても、感動詞を「他語の上に用ゐるもの」(「あ、あゝ、あら、あな、あはれ、や、やあ、やよ、いかに、いで、いざ、あはや、すは」など)、「他語の中間、又は、下に用ゐるもの」(「や、も、は、を」など)、

「他語の下に用ゐるもの」(「な、よ、か、かも、かな、が、がも、がな、なむ、かし」など)の三種に分けている。しかし『口語法別記』においては、「感動詞わ、語、句、文の上につかうがあり、中につかい、又、下につかうものがある。下につかうものわ、別けて、助詞の中え入れた、理に合わぬようだが、先わ、こうした。」(p.411)として、「これさ、待ちなよ。」などにおける「さ」のような一部の語をのぞき、助詞を感動詞から除外している。このような大槻の論の変化は、明治期から大正期にかけての感動詞に対する意識の変化を示しているといえるのではなからうか。

「呼掛」の列において、「△」・「○」の印がついたのは、全36文献中32文献(88.9%、「△」=19文献、「○」=13文献)である。明治期以

上に割合が高くなっており、大正期には、感動詞における呼びかけの機能が、より広く認められていたといえる。

「応答」の列において、「△」・「○」の印がついたのは、全36文献中21文献(58.3%、「△」=13文献、「○」=8文献)である。明治期の13.7%から大きく数字を伸ばしており、感動詞に応答の機能を認める立場の論は、大正期に広まったと考えることができよう。

以上、本項では大正期の文典における感動詞の記述を概観した。

3.4 昭和期における「感動詞」について

本項では、昭和期の文典の調査結果を示す。結果は表3の通りである。

(表3) 感動詞の定義に関する対照表・その3——昭和期

	著者・編者および書名	発行年月	術語	助詞	呼掛	応答	備考
(161)	小林好日『国語国文法要義』	1927.3	感動詞		○	○	
(162)	松下大三郎『改撰標準日本文法』	1928.4	感動詞	○	△	△	
(163)	平尾須美雄『中等参考国文法の要領』	1928.7	感動詞	○			
(164)	笹川種郎・関根正直『昭和国文法提要』	1928.11	感動詞				
(165)	小林鶯里『国文法の知識』	1929.4	感動詞		○		
(166)	山下賤夫『文検用・学生用国文法』	1929.5	感動詞		○	△	
(167)	広島高等師範学校附属中学校国語漢文研究会編『新編国文典』	1929.10	感動詞		△	△	注 ¹⁸
(168)	杉生薫『自学自習と受験の準備詳説国文法』	1931.5	感動詞		○	○	
(169)	三省堂編輯所編『分り易く・覚え易い日本文法の研究』	1932.4	感動詞		○	○	
(170)	佐成謙太郎『新修女子日本文法』	1932.9	感動詞		○	○	注 ¹⁹
(171)	吉沢義則『修正新制中学文典教授書』	1932.12	感動詞		○	○	
(172)	石川在脩『自学受験要領適確なる国文法』	1933.2	感動詞		○	○	
(173)	福井久蔵『新修高等国文典』	1933.5	感嘆詞		○	○	
(174)	広島県立呉第二中学校国漢文研究会編『国文法の整理と練習』	1933.6	感動詞		○	○	

	著者・編者および書名	発行年月	術語	助詞	呼掛	応答	備考
(175)	吉田弥平『中学日本文典 第一学年用』	1933.9	感動詞	○	△	△	
(176)	木枝増一『文語法精説』	1933.12	間投詞		○	○	
(177)	湯沢幸吉郎『口語法精説』	1934.3	感動詞		○	○	
(178)	守屋武士『整理された文法知識』	1934.3	感動詞		△		
(179)	高木武『新日本文法教授資料実業学校用』	1934.6	感動詞		△		
(180)	井上正男『最も分り易く・最も要領良い国文法ノかぎ』	1935.1	感動詞	○	△	△	
(181)	明治書院編輯部編『国文法大意第二版中学一学年用』	1935.5	感動詞		△		注 ²⁰
(182)	丸山茂『学習受験一目でわかる国文解釈法』	1935.5	感動詞		○	○	
(183)	山田園臣『国文法の学習と練習』	1935.7	感動詞		○	○	
(184)	吉沢義則『改訂女子新国文典別記』	1935.10	感動詞		○	○	
(185)	松尾捨治郎『新撰国語法教授参考書』	1935.11	感動詞		△	△	
(186)	徳田浄『新制国文法』	1936.2	感動詞		△		
(187)	藤村作『中等教科文法初級用教授用書』	1936.5	感動詞		○	○	
(188)	佐成謙太郎『三訂女子学習文法』	1936.9	感動詞		△	△	
(189)	佐成謙太郎『新修日本文法教授資料初年級用』	1936.11	感動詞		○	○	
(190)	太田行蔵『学習受験国文法指針』	1936.11	感動詞		△		
(191)	木枝増一『高等国文法新講品詞篇』	1937.2	感動詞		○	○	
(192)	牧野栄三『簡明適切国文法と書取の新研究』	1937.10	感動詞			△	
(193)	大和信夫『文語口語対照受験問題解答国文法要義』	1937.10	感動詞		○	○	
(194)	保科孝一『新編女子日本文法教授要領初学年用』	1937.12	感動詞		○	○	
(195)	松尾捨治郎『国語法大綱』	1939.5	感動詞		△		
(196)	村上塾指導部『受験の指針国文法の建設と完成』	1940.10	感動詞		○	○	
(197)	杉山栄一『国語法品詞論』	1942.12	終止詞		△	△	

表3をふまえ、昭和期の文典における感動詞の定義の特徴を見ていく。

「術語」については、全37文献中34文献(91.9%)が「感動詞」であった。大正期に引き続き、「感歎詞(感嘆詞)・間投詞」は外国語に関わる文典に多く見られる。「感動詞」は大正期の80.6%からさらに数字を伸ばしており、ほぼ一般に定着していたと見ることができよう。(197)の杉山栄一『国語法品詞論』(1942年12月)では「終止詞」としているが、解説においては

「これはいはゆる感動詞に属するもの」(p.85)としている。

「助詞」の列において、「○」の印がついたのは、全37文献中4文献(10.8%)である(「△」に該当する文献なし)。明治期の66.1%、大正期の41.7%に比べると、大きく数を減らしている。

(168)の杉生薫『自学自習と受験の準備詳説国文法』(1931年5月)では、「感動の言を表す語に、や よ かな かし ね よ ぞ 等の

やうに文の終に用ひられるものがあるが、本書ではそれ等を助詞の中に入れてある。元來此の種の助詞と感動詞の區別に就ては、学者によつて見解を異にしてゐて、かの大槻博士の言海、金澤博士の辞林などは、此等の語を感動詞として取扱つて居られるやうであるが、其の他の多くの学者は感動の意をもつ助詞として、助詞に属せしめて居るやうである。」(p.154)と論じており、この文典の執筆当時、すなわち昭和初期においては、「多くの学者」が助詞を感動詞には含めない立場をとっているという認識が広まっていたとみられる。

「呼掛」の列において、「△」・「○」の印がついたのは、全37文献中34文献(91.9%、「△」=13文献、「○」=21文献)である。大正期と同様、大半の文献が感動詞に呼びかけの機能を認めている。

「応答」の列において、「△」・「○」の印がついたのは、全37文献中28文献(75.7%、「△」=9文献、「○」=19文献)である。大正期の58.3%からさらに数字を伸ばしており、感動詞に応答の機能を認めることが一般的になりつつあったことを示している。

「呼掛」・「応答」の割合の増加に関連し、昭和期になると、感動詞について、「感動の表出」,「呼びかけ」,「応答」の機能を有すると明言する文献が増える。「呼掛」・「応答」の両列に「○」の印がついた文献は、明治期では全124文献中9文献(7.3%)、大正期では全36文献中8文献(22.2%)、昭和期では全37文献中19文献(51.4%)である。

(171)の吉沢義則『修正新制中学文典教授書』(1932年12月)では、「感動詞」について、次のように解説している。

感動詞は普通次のやうに分類してゐる。

(一) 感情を表すもの

あゝ あら あな おや あはれ おゝ
(二) 呼掛を表すもの

やあ おい やよ おうい いで もし
もし\ / いざ すは

(三) 応答を表すもの

はい へい えゝ いゝえ いや

(p.15)

「普通」という表現が用いられるほどに、昭和初期において、感動詞の機能は「感動の表出」,「呼びかけ」,「応答」に分類されるという認識が広まっていたと考えられよう。

以上、本項では昭和期の文典における感動詞の記述を概観した。

4. まとめ

第3節では、明治期、大正期、昭和期の文典における感動詞の定義を観察した。その成果を整理すると、以下のようになる。

シ.「感動詞」の術語は、明治後期より「感歎詞(感嘆詞)」よりも広く使われるようになり、昭和期には9割超の文典で用いられるようになっていた。

ス.明治期には「助詞」を感動詞の一類とする立場の文典の方が多いが、大正期には「感動詞=独立語」であると論ずる文典が増えるようになり、昭和期には約9割の文典が助詞を感動詞から除外している。

セ.感動詞に「呼びかけ」の機能を認めることは、明治中期には一般的になっていた。

ソ.感動詞における「応答」の機能は、明治期には1割強の文典でしか認められていないが、大正期には半数以上、昭和期には7割超の文典で認められるようになった。

タ.感動詞は「独立語」であり、かつ「感動の表出」,「呼びかけ」,「応答」の機能を有するという認識は、昭和初期には広まって

いたのではないか。

現代における感動詞に対する認識は、昭和初期には一般的になっていたと考えられる、というのが本稿の結論である。

5. おわりに

本稿では近代の文典を資料として、現代における感動詞の成立について考察したが、紙面の都合もあり、限られた文典しか示すことができなかつた。より詳細に論ずるためには、さらに多くの資料を観察する必要があるだろう。

注ならびに参考文献

- ¹ 小林賢次「感動詞」（飛田良文・遠藤好英・加藤正信・佐藤武義・蜂谷清人・前田富祺編『日本語学研究事典』、明治書院、2007年1月、pp.219-220）
- ² 金田一春彦「感動詞」（国語学会編『国語学辞典』、東京堂出版、1955年8月、pp.216-217）
- ³ 鈴木一彦「感動詞とは何か」（鈴木一彦・林巨樹編『品詞別日本文法講座6 接続詞・感動詞』、明治書院、1973年5月）、p.144より。
- ⁴ 例外がないわけではなく、例えば佐藤武義・前田富祺ほか編『日本語大事典』（朝倉書店、2014年11月）では、「感嘆詞」（佐藤琢三執筆）で見出しを立てている。
- ⁵ 鈴木一彦「感動詞とは何か」、注3参照。
- ⁶ 松岡洗司「感動詞における研究史と位置づけ」（『上智大学国文学科紀要』第14号、1997年3月）
- ⁷ 山口堯二「感動詞・問投詞・応答詞」（『研究資料日本文法 第4巻 修飾句 独立句編 副詞・連体詞 接続詞・感動詞』、明治書院、1984年9月）、p.126。
- ⁸ 井島正博「近代文典におけるいわゆる推量助動詞」（『日本語学論集』第五号、東京大学大

学院人文社会系研究科国語研究室、2009年3月）

- ⁹ 例に挙げられている語が、すべて助詞である（ヤ、ヨ、モ、ヲ、ナ、カ、カモ、カナ、エ、ハヤ）。
- ¹⁰ 『言海』本編では、「あい、はい」等を感動詞としている。
- ¹¹ 「助詞」の下位分類に「感歎」を立て、「あ、あゝ、あら、あな、あはれ、いざ、いで、やよ、やよや」なども助詞として扱っている。
- ¹² 本稿では1901年8月発行の『訂正日本文法筌蹄』を確認した。
- ¹³ 本稿では割合の算出にあたり、百分率の小数第二位以下を四捨五入した。
- ¹⁴ チャンブレン、ビー・エッチ『日本小文典』（文部省編輯局、1887年4月）。国立国会図書館所蔵の資料を確認した。
- ¹⁵ 本稿では1918年2月発行の訂正再版を確認した。
- ¹⁶ 本稿では1924年1月発行の訂正再版を確認した。
- ¹⁷ 国語調査委員会編・文部省『口語法別記』（国定教科書共同販売所、1917年4月）。国立国会図書館所蔵の資料を確認した。
- ¹⁸ 本稿では1930年10月発行の訂正再版を確認した。
- ¹⁹ 本稿では1933年1月発行の訂正再版を確認した。
- ²⁰ 本稿では1935年7月発行の訂正版を確認した。

本稿において「国立国会図書館所蔵」とした資料は、『国立国会図書館デジタルコレクション』（<http://dl.ndl.go.jp/>）にて閲覧したものである。ただし一部の資料は国立国会図書館内、または国立国会図書館の「図書館向けデジタル化資料送信サービス」に参加する一部の公共図書館・大学図書館等でなければ閲覧できない。

